

平成 17 年 6 月の解説（府県天気予報）

【6月の天候状況】

上旬は、本州付近が移動性高気圧に覆われたため晴れや曇りの日が多くなりました。中旬から下旬中頃にかけては、梅雨前線が南西諸島から本州の南岸付近にかけて停滞したため、南西諸島や東日本の太平洋側を中心に曇りや雨の日が多くなりましたが、西日本では梅雨前線の活動が不活発で高気圧に覆われやすく晴れの日が多くなりました。梅雨前線は月末になって北上し、本州中部に停滞して活動が活発になったため、北陸を中心に日本海側の地方で大雨が降りました。

月を通しての日照時間は北日本と西日本で多く、多くの観測地点で平年の 120% 以上となりました。一方、南西諸島では少なく全ての観測地点で平年の 80% 以下となりました。降水量は、北・東日本の太平洋側と西日本で少なく、西日本を中心に多くの観測地点で平年の 40% 未満となりました。月平均気温はほぼ全国的に高く、日本海側を中心に多くの地点で平年より 2 以上高くなりました。

【6月の検証結果】

17 時発表「降水の有無」の全国平均の適中率は、明日予報では 83% で例年^(注)より 2 ポイント高く、明後日予報では 78% で例年より 3 ポイント高くなりました。地域毎の適中率は、明日予報では九州南部地方で 7 ポイント、東北地方と東海地方で 1 ポイント低くなりましたが、その他の地方では概ね 2 から 5 ポイント高くなりました。明後日予報では東北地方で 1 ポイント低くなりましたが、その他の地方では高く特に中国地方では 15 ポイント高くなりました。最高気温の予報誤差は、全国的に例年より小さいか例年と同様で、全国平均では例年より 0.1 小さい 1.9 でした。また、最低気温の予報誤差は、九州南部地方では 0.4 小さくなりましたがその他の地方ではほぼ例年と同様で、全国平均では例年と同じ 1.3 でした。

(注) 例年値は気象庁HP（評価）内「月毎の精度の例年値」を参照してください。

【6月の天気予報から】

空気は上昇したり下降したりすることでその温度が変わります。一般に、湿った空気が雲粒や雨粒を生成しながら上昇する場合は 100m 毎に 0.5 程度しか下がりますが、乾燥した空気が上昇（下降）する場合は 100m 毎に 1 程度下がり（上がり）ます。このため、湿った空気が山を越える際に、空気が山の風上側で雨を降らせながら上昇（100m 毎に 0.5 程度下がる）して乾燥し、その空気が風下側で山を降りる（100m 毎に 1 程度上がる）と、結果的に山を越える前より気温が上がります。これをフェーン現象といいます。

関東甲信地方が 6 月 10 日頃に梅雨入りした後、本州の南岸付近に停滞していた梅雨前線は、6 月 27 日には、東北地方まで北上し、北陸地方では大雨が降っていました。関東地方は梅雨前線の南側にあたり、上空では北陸地方の西部から関東山地を越える西風が吹いていてフェーン現象を

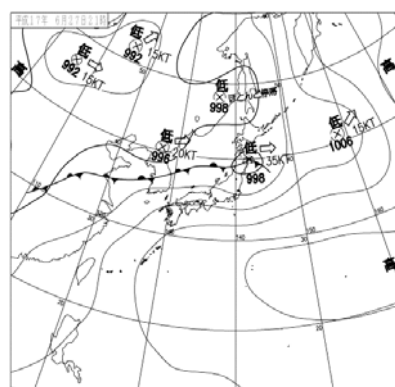


図1 2005年6月27日21時の地上天気図

起こしやすい気象条件となっていました。このため関東地方では夜になっても気温が下がらず、東京（大手町）では28日の朝5時に約28度もありました（図2）。この日の日中は晴れて日射で暖められたため、さらに気温が上昇して正午前に36.2度を観測し、6月の日最高気温第1位の記録を更新しました。

27日夕方に発表した翌28日の東京地方の天気予報では、梅雨前線の南側で暖かい空気に覆われていること、フェーン現象が発生し易い気象条件であることに加えて、28日の日中は晴れることを予想して最高気温を平年より約7度も高い33度と発表しました。ところが現実にはさらに3度ほど高くなりました。観測記録を更新するような、極端な気象を予想するのは非常に難しいことです。

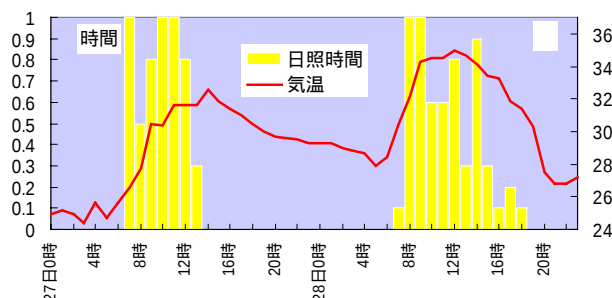
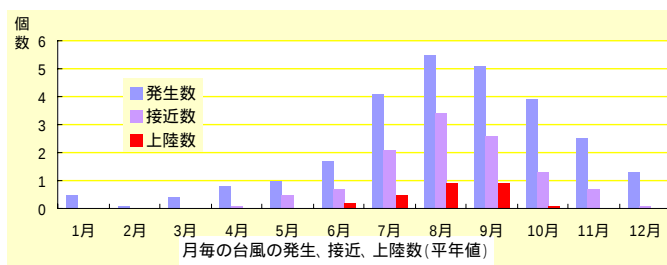


図2 東京の1時間毎の気象変化(6月27日～28日)

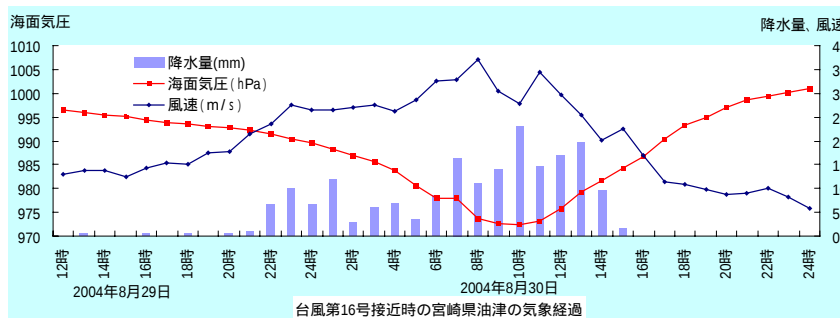
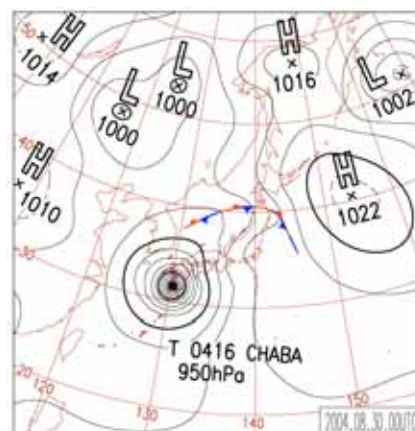
【8月の天気予報の利用にあたって】

8月は9月と並んで台風災害の多い月です。1971年～2000年までの30年間の平均では、8月は台風の発生数（5.5個）、接近数（3.4個）、上陸数（0.9個）ともに1年の中で最も多い月になっています（右図）。最近では、2004年8月には発生数8個、接近数6個、上陸数3個と大変多くなりました。



2004年の8月30日に、台風第16号が、鹿児島県に上陸して九州を縦断した後中国地方、日本海、北海道へと進み、暴風、大雨、高潮等により日本各地に多大な被害をもたらしました。

宮崎県の油津では台風の接近に伴い29日夜から雨風が強まりました。台風が最も接近したのは30日の10時頃で、このとき気圧が最も下がりました。風が最も強かったのは8時頃ですが、台風が離れつつある11時にも35m/sを超える猛烈な風が吹いています。雨は台風通過の前後数時間に渡って1時間に10mm～20mmの強い雨が降っています。台風が近づきつつあるときには、もちろん警戒が必要ですが、離れ去るときにもしばらくは暴風や強雨に警戒が必要です。



台風が日本付近を通ると予想されている場合には、常に台

風情報、注警報、天気予報などの最新の気象情報を入手して十分に警戒されることが重要です。